

# アトリエ 琉游舎 だより 162号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2023年9月27日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## こおろぎのころころ一人笑い哉



一茶

- 秋の虫の声が聞こえる頃となりました。今年は夏の暑さが長く続きしかも猛暑だったため夏の虫も秋の虫も去り際や、出番のタイミングが難しかったに違いありませんが、それでも朝晩は秋風らしきものが吹いて、少し気温も和らいできたようです。
- 暦の上では今頃は七十二候の「蟄虫坏戸（むしかくれてとをふさぐ）」にあたります。虫たちは卵や幼虫の姿となって冬越しの準備を始めます。カメムシやテントウ虫や、蜂でも新女王蜂だけが成虫のまま越冬するようですが、コオロギやバッタは死んでしまいます。
- 秋の虫たちの声は冬ごもりのための準備の鳴き声でしょうか。オスとメスが互いに呼び合い子孫を残すために鳴くのか、自分の死が間近に迫ること（冬の到来）を察して残り少ない命を謳歌する声なのか、命を惜しむ惜別の声、断末魔の叫び。寝床で虫の声を聞いていると、鳴き声の競演とともに虫たちにはおよそ無関係な感情を私たちの胸に響かせます。
- 秋の虫の鳴き声は様々で、私はそれを虫ごとに聞き分けることはできませんが、鈴虫とこおろぎの鳴き声なら区別がつかます。一茶は「ころころ」と鳴くこおろぎを「一人笑い」と表現しています。人前で一人笑いをしたら何かを思い出したか想像した笑いでしょうから、それを見せられた人は不審感を持つかも知れないので、あまりお行儀のよい笑いではないでしょう。コオロギは何を思って一人笑いをしていると一茶は感じたのでしょうか。
- 一人の時の一人笑いはそれを見ている人もいない笑いです。一茶も誰もいない部屋で一人こおろぎの鳴き声を聞き、それを一人笑いとして聞いてしまった自分に思わず一人笑いをしてしまったのかも知れません。なんと孤独な笑いでしょう。でもなぜか自嘲的な響きは感じられません。むしろ虫の声に囲まれ孤独を楽しんでいるような幸福感を私は感じます。
- 人やテレビや車など様々な音に囲まれて暮らす生活の中で、孤独を幸福と味わえるとき、それが秋の虫の声とともに過ごす今の季節かも知れないと一茶の句はおしえてくれています。

### 9月・10月スケジュール

9月			10月			
月	火	水	28	29	30	10月1日
2	3	4	5 映画会 お休み	6	7	8
9	10 読書会 13時半から	11	12 映画会 13時半から	13	14	15
16	17	18	19 映画会 お休み	20	21	22
23	24 読書会 13時半から	25	26 映画会 13時半から	27	28	29

読書会

10月10日  
10月24日  
(火) 13時半

写経会

10月は中止  
いたします

映画会

変則日程です

今回の狂言綺語を書き始めた日は9月18日です。発行日まで1週間以上ありますが、23日土曜日は昨年3年ぶりにリニューアル復活したコリーナの祭り「コリーナジャムフェス2023」の本番の日当たるため、いつもならゆっくり時間を取れる週末が準備と片付けに追われるに違いないので、少し早めに書き出し始めたわけです。いつも通り今回も何を書こうかも決めず、まずはパソコンの前に座って、さて今の私に縁起するありのままの今はなんだろうと思いを巡らし、それが観えてくると後はそのままに書き留めていくと私の信行の道が現れてくるのですが、今回は一向に縁起の今が現れず冒頭を書き出すことができません。6月から未だ続く暑い夏に押れきって、日常が停滞しているようです。季節の季節らしい移ろいが待ち遠しいばかりです。

信行の道が現れない言い訳もどきを冒頭に書き綴りながら、気づいたことがあります。それは18日が敬老の日だということ。朝からテレビや新聞で目にする敬老の日まつわる数字は全体像や今後を予想するためには必要なものですが、いざそれを自身の身に当てられると私が高齢者と分類される根拠と理由、立ち振る舞いについて無頓着ではられません。社会制度上では65歳から高齢者となった私は日本人の29%、矢板市民の33%の一員です。58歳で経済活動から退出したため、無職無収入の毎日を65歳まで送って来た私は社会制度上はいかなる年齢的な名称も規定もない状態で過ごしてきましたが、これからはまた年齢により統計分類される身分となりました。高齢化社会の現実と照らし合わせて今では65歳になったからといって敬老者として敬われるような時代ではなくなっています。各地の敬老会招待者も年々基準年齢が上がり、矢板市では80歳以上が被敬老者として祝福されます。すると65歳から80歳までの範疇に属する者は高齢者であるが被敬老者ではないということ。私は80歳になって晴れて社会から敬老される身分になるまで、高齢者としていかに生きるかを自ら願い誓い行っていかなければならないのでしょうか。因みに80歳以上は全人口の10%です。高齢者の25%は仕事についており就業者全体の13%強です。私を含めた高齢者の70%は働いておらず時間だけはふんだんにあります。自らの選択によって仕事もボランティアも趣味に生きることも、どのような生き方でも可能なはず。そこで私は無為徒食の高齢者として生きていくことを選択したいと考えています。

「無為徒食」はネガティブな印象しかない言葉かもしれません。「なすべきことを何もしないでただ遊び暮らすこと。食べるだけであること」という辞書的な意味に従えば、社会的に役に立たない、無駄めし食いとされているようです。しかし果たして“何もしないでただ無駄に毎日を過ごすこと”は「悪」でしょうか。「徒食」という言葉には既に働かずに遊び暮らす者との意味が込められていますが、生きるためには食べなければならないので、生きている限りは無駄な「食」はないはず。それよりも何もしないことが問題なのではないでしょうか。つまり「無為」が非難的になっていると考えられます。仏教用語の「無為」は生滅変化を離れた常住絶対の真実。悟りです。つまり自然のままにして作為しないあるがままにあることです。一方何もしないでぶらぶらしていることという意味もあります。「無為無策」や「一日を無為に過ごす」という使われ方です。この意味の二重性は、自分は悟ったと広言を吐く僧侶の説教はごもつともだが、そこに行いが伴わず毎日無駄めしを食べて暮らしているように見える出家者を揶揄するために出てきた意味かもしれません。

今まで、仏語起源の言葉が正反対の意味で現在に流通している言葉について何度か書いてきました。「無為」もその一つに思われます。仏教用語の中でもお釈迦様の教えの原理（法）を表す言葉は「諦める」や「無分別」のように社会の中では意味の反転が起こることはしばしばです。その原因は「法」の言葉が出世間の言葉だからです。出世間の言葉はそこでのみ意味を持つ言葉です。つまり出家した私（個）とお釈迦様（法）とを「信」を媒介にして繋ぐ言葉です。僧侶は出世間することでお釈迦様との間に「信」を結び、それをもって社会に戻りその「信」を支えにして「願い誓い行う」者たちのことです。「法」の言葉を社会生活の中で振り回してもそれは理解されることも共感されることも不可能です。社会の中（娑婆世界）でその言葉を機能させようとしてもそれは虚言か絵空事にしか聞こえないでしょう。なぜならその言葉は「信」のみによって意味をもち機能する言葉だからです。出世間した僧侶は出世間したままでは生きていくことはできません。私たちが食べていく場所はたとえそれが「徒食」にみえようとも娑婆世界以外にはありえないのです。それは僧侶も同じです。僧侶が唯一、偽善や高踏的にはみえない「無為徒食」の者として社会に存在する意味があるとすれば、それは世間（娑婆）に居て出世間で結んだお釈迦様との言葉を支えに「願い誓い行う」ことの日常を生きることに尽きるのです。娑婆（日々の生活）で出世間の言葉を振りかざす僧侶はそれこそ無為徒食（無駄飯食い）の者です。「無為」＝「ありのまま」であるためには法の言葉が他者に説教するためにあるのではなく、自らのお釈迦様との「信」を確認して「行」の道しるべとするための言葉でなければなりません。そして生きるために娑婆で「徒食」する僧侶の私は、ありのままに観てありのままに生きる毎日を送り続けることが、「無為徒食」の高齢者として生きていこうと考える私の願い誓い行い。社会や他者の何かの為（有為）にではなく、ありのままの為（無為）に日々を送ることがどのような縁起をもたらすそれがまたどのような明日を引き起こすのか、高齢者となってもまだまだワクワクする日々が続きます。

何か（有為）ではなく何物でもないもの（無為）に毎日を生き、そして畑で虫たちと分かち合った野菜が美味しく頂くことができるならば、たとえそれが日々を無為無策に過ごしているようにみえてしまっても、それは安らぎの処な

琉游舎：戸井 出琉・恭子  
問い合わせ：0287-53-7848 08033508152  
矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850  
メール：toi101izuru@outlook.jp

のではないのでしょうか。秋になりきらないある秋の日の無為徒食者の思いです。